

## いのちって何？

(原文)

二反田 優 (16 歳)

鹿児島県

鹿児島市立鹿児島玉龍中学校・高等学校

「いのちって何？」をテーマに、自分の思いをつづる。この大きな問いかけに、僕は二つの出来事を思い出した。

一つ目は初めて葬儀に参加した時のことだ。幼い頃から、僕たち兄弟を自分の孫のように可愛がってくれたおじさんが、去年亡くなった。もともと華奢な体格のおじさんだったが、癌を患って以来、おじさんはみるみる痩せていった。お見舞いに行くたび、おじさんは小さくなっていた。僕はその姿を見るのが少し怖かった。体調が悪くとも、それを一切僕らに見せることなく、いつも笑顔で迎えてくれる優しく強い人だった。最期まで病と闘いぬいたおじさんの体は、ガリガリに痩せて、燃え尽きたマッチ箱のように棺の中で眠っていた。

田舎に暮らすおじさんは、夏休みには僕らをよく海に連れて行ってくれた。藪を分け入り、自分しか知らない穴場のスポットで僕らに釣りを教えてくれた。お正月やお盆にはごちそうを用意して、いつも笑顔で僕ら家族を待っていてくれた。葬儀中、読経を聞きながら、おじさんと共に過ごした楽しい時間を思い出した。出棺の際、棺桶で眠るおじさんの周りに花をたむけた。多くの人がお別れの際に、頬に触れて涙を流していた。でも僕はおじさんの亡きがらに触れることができなかった。おじさんの死を、温度で感じる事が怖くてできなかった。おじさんの体を覆っている、恐ろしい何かに触れるような気がして躊躇したのだ。大好きだったおじさんに、ちゃんとお別れが言えないような自分自身に失望した。誰にも言えない気まずい思いを心に隠しながら、僕はおじさんにお別れをした。

二つ目は自分の出生に関する思い出だ。僕ら兄弟は三つ子として生まれた。自分だけ、出生時の体重が 1500 グラムしかなかった。胎内で上手く栄養が取れなかった僕は、身体のいろんな発達が未熟だったらしい。自分が小学生の低学年の頃に、母が新生児センター内の保育器で眠る僕の写真を見せてくれたことがあった。僕の体に手を添える母の手と比べても、自分の体がものすごく小さなことが分かる。鼻からは赤と黄色の細いチューブが伸びており、手や足の甲からも細いチューブが機材につながれていた。それらのチューブで胃に直接栄養を送っていたのだと聞かされた。写真の中の生まれたばかりの自分は、シワシワで弾力がない灰色がかかった肌色だった。これらのチューブが外されたら、今にも消えてしまいそうな命に見えた。自分の命が、か細く頼りないものだった事実を突きつけられたような気がした。自分が不幸で哀れな赤ちゃんだったように思えて、僕はわんわんと声を出して泣い

たことを覚えている。

諸行無常ということばがある。この世のすべての物は移り変わり、一瞬として同じ状態にとどまっ  
てはいない、という自然の真理を説いた言葉だ。生あるものはいつか必ず滅びる。花の美しさも永遠で  
はない。だからこそ今、目の前の美しさに価値がある。このことを4文字に込めた言葉だ。命は儂く、  
だからこそ美しいのだ。

今、自分は健康で、自分のすぐそばに「死」を感じる状態ではない。だが、おじさんの命、生まれた  
ばかりの自分の命。この二つの出来事は自分に、「今」を楽しみながら丁寧に生きる大切さを教えてく  
れた。それはきっと、「いのちって何？」というテーマの答えにも重なるものかもしれない。いつか終  
わりの来る自分の人生は、「今」の連続の先にあるのだから。

自らが想像する死とは、暗闇の世界だ。だが、その暗闇があるからこそ、命もまた輝きを増すのだと  
思う。限りある命だからこそ、かけがえのない「今」を大切に輝いて生きる。力強い光が、今、自分の  
心の中に生まれたような気がした。